



私立女子美術学校創始者横井玉子の夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(6)「横井家文書」所収の横井大平書翰から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堤, 克彦, TSUTSUMI, Katsuhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://joshihi.repo.nii.ac.jp/records/27.1

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



私立女子美術学校創始者横井玉子の 夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(6)

「横井家文書」所収の横井大平書翰から

▶堤克彦

はじめに

このシリーズは『女子美術大学紀要』第45号(2014年度)から始めた。第49号(2018年度)掲載の「研究報告」では、明治元(1868)年〔4通-残り1通〕の⑫A137 伊勢佐太郎・沼川三郎連名書翰と明治二(1869)年〔2通-1通〕⑩A132 伊勢佐太郎書翰(在米、六月二十一日)・沼川三郎宛(在長崎)について、関係書翰の内容に触れながら紹介してきた。

本号では、和暦と西暦の未整理から、最初慶応元(1865)年十二月九日と推定し、後掲の【解説】に記したような時代的条件から、明治二(1869)年十二月九日に変更した書翰⑧A148 沼川三郎(横井大平の変名)書翰・宿元宛(母上・つせ・又雄、在長崎、十二月九日)を整理番号そのままに見ていくことにしたい。

○明治二(1869)年〔3通〕 — 左平太(25歳)・大平(20歳)、横井小楠暗殺(一月五日)。大平帰国(十二月)・在長崎

8	A148	沼川三郎書翰(在長崎、十二月九日)・宿元宛(母上・つせ・又雄)
---	------	---------------------------------

この書翰は、1999年8月5～8日に横井小楠の曾孫横井和子氏の縁戚である神戸市東灘区の柳瀬家で行なった「横井家文書」調査ではこの書翰の後半分しか見つからなかったが、ちょうど15年後の2014年8月6日に、熊本大学附属図書館で行なった再調査の際、その前半部分が発見された。

もし前欠部分(【釈文】中に〔前半部分と後半部分〕を記入)が未発見のままであれば、この書翰の歴史的価値もその意義もまったく見出せなかったであろう。そのような「日く付き」の書翰の持つ重要性を是非実感してもらいたい。

⑧A148 沼川三郎(横井大平の変名)書翰・宿元宛(母上・つせ・又雄)。沼川三郎(在長崎、十二月九日)・横井小楠(一月五日、暗殺)

【釈文】

内藤貞八(内藤泰吉の実弟か、肥後藩の物書役人、明治四

[1871]年白川縣大属) 帰郷ニ托し、一書奉拜呈候。時下寒氣難凌御座候處、被為揃益御機嫌克被遊御座、恐悦之御儀ニ奉存上候。次ニ私事何ぞ相替り不申候。続而塩梅(あんばい)も宜敷御座候間、乍憚御安心奉願候。

然は先達而御帰着、即下御仕出之御状後は絶而御便りも無之、如何と奉案劣居候處、先日不斗内藤氏(内藤泰吉)・岩崎(人物不詳、乞御教示)御平安之段ハ、同人(内藤貞八)より承知仕候。先月下旬よりハ、私も婦之積ニ而、書状さし出不申候。御元よりも帰郷御傳被成、御書状御仕出も無之事と奉存候。

去ル六日ニ有吉(有吉将監、または有吉市左衛門か、いずれも「執政」の一人) 殿家中(家人) 江藤(知行取、江藤潤右衛門、または江藤武助のいずれか。乞御教示) 帰国仕候間、同人ニ御頼ミ、菓子箱、其外羽織等さし出置、最早御落手被下たると奉存候。私帰り延引之段ハ、江藤も承知致居、同人も沼山津え罷出、夫々御嘶可申上との事ニ御座候。筆先きニ而は、情実通し兼可申候。何角兎(ま、何かと) 御懸念可被成下候相考、今度得斗内藤え相語り置、同人より直ニ様子も言上可仕、呉々も御安慮被下候様奉願候。

一、去ル五日、佐太郎(伊勢佐太郎、兄横井左平太) 様より之御状相達し差上候間、御覽可被成下候。大政官(明治元年閏四二十一日設置) より之御免許、殊之外延引ニ相成、彼是御不都合ニ相成候由。三郎(大平) ニおゐても甚心痛、段々爰元ニ而心配致、當港之知事野村氏(長崎県知事野村盛秀〔明治二年六月二十日～同三年十二月十九日〕) え面會、御書状之趣き相嘶候處、同人より直ニ東京府之方え可申達との事ニ相成申候。

其上長州之人、岩倉公子方御一同ニ東京ニ参り、同人ニも周旋相頼置、何とぞ急にだち明き(ま、らち開き、一気に開け掛ることか) 御様存仕候處、今般御紙表(佐太郎の手紙か) 之趣ニ而は、最早御手元え御達し、御受取ニ相成、萬歎(ま、万端か) 御手数等も相済ミ、来年(明治三年) 五月より弥御入校(「アナポリス」入校) ニ相成候御様子被仰越、實ニ三郎ニおゐても、大慶之至ニ、もはや死しても不苦、近日内ニは御神酒ども上ケ候筈ニ御座候。御元ニ而もずるふん御神酒ども御上ケ被成候様子奉

存候。

一、御国より御註文之軍艦(龍驤丸、イギリス船、明治三年三月受領予定)、三・四日以前ニ着帆ニ相成、直ニ見物ニ罷越候処、先年兵庫ニ而相交候長州生竹田庸治郎と申人、英国より便船(定期便)ニ而参り、寛(ゆる)りと面會、色々あちら之様子ども承り申候。

何れ近日内ニは、牛嶋(関流算学師牛嶋五一郎〔1820～1898〕、熊本藩士。航海術を学ぶ。熊本藩で初めての蒸気船・甲鉄艦龍驤丸艦長)先生始罷在輩、出崎ニ相成可申候。頻ニ相傳居申候。御船御国え爰廻しハ、何れ来(明治三年)正月ニ相成可申候。其外願目(願ひ事の意か)、三郎も一日ニ歸郷之心得ニ御座候。

一、歳晩之御仕舞(年末の大掃除)ハ、如何可在之哉。まけて御世話御察し申上候。今度嘉悦(市之進、氏房)・内藤(貞八)え、私よりも頼ニ書出状遣し候。何も兩人え御談し、御仕舞置可被成下候。三郎も今少し甘快(恢復)ニ相成候迄之処、どふとぞして御世話置被下候様奉願候。

一、隣家得永屋えは、弥世話ニ相成、若御元より便り有之候節ハ、

(以上前半部分、以下後半部分)

何ぞ御遣し被下候様奉願候。色々申上度事も御座候得共、何分残筆ニ難尽、委細ハ内藤(貞八)より相傳聞可被成下候。先は右差し上度、書外は讓後音候。目出度可祝(めでたくかしく)。

十二月九日認 沼川三郎(横井大平の変名)

御母上様
おつせ様
又雄様

二白(迫伸)甚寒之砌乍憚御自養、御暮し被遊候様奉祈候。おつせ様ニは御大病後ニも寒氣十分御保養御世話被成候様奉祈候。

一、先日、お宮(小楠娘みや子)さんはおり(羽織)送り置、どふぞ氣ニ入候かしと祈居申候。

一、先達而以来、吉雄(長崎、オランダ通詞吉雄耕牛の曾孫圭齋、外科医)之世話ニ而、取だち(取り立て)之牛乳手ニ入候。日々一合ツ、相求メ、不怠相用申候。製法致し候ち、(加工乳)よりどふしても宜敷様相覚へ申候。

【解説】

「横井家文書」所収の横井左平太・大平の渡米前後の書翰類一覧作成の際、前述したように、この⑧「A148 沼川三郎(横井大平の変名)書翰」は最初慶応元(1865)年「十二月九日認」の書翰としていたが、つぎの三点を理由に明治二(1869)年の「十二月九日認」に訂正した書翰である。

(1) この書翰には明治政府の諸制度である「太政官」・「知事」・「東京府」などの文言が散見し、後号掲載の⑨A152「横井大平履歴」(月日不明)には、「年ヲ踰(こえ)テ、大平肺患ニ罹リ、醫ノ勧告ニ従テ帰朝、病ヲ養フ時ニ、天下維新ノ政治ニ風靡ス」云々から、幕末の慶応年間ではなく明治維新以後であることが明確となった。

(2) また沼川三郎(横井大平)は、おそらく明治二(1869)年九月中・下旬頃(十二月説あり)には、肺病罹患で已むなく帰国、その後長崎に滞在していた。この書翰中に「當港之知事野村氏(長崎県知事野村盛秀)え面會」云々により、県知事任職中〔明治二年六月二十日～同三年十二月十九日〕の野村盛秀に面會後の「十二月九日認」めたと判断した。

(3) さらに「御国(肥後藩)より御註文之軍艦(龍驤丸、イギリス船、明治三年三月受領予定)、三・四日以前(十二月六日)ニ着帆ニ相成、直ニ見物ニ罷越」云々から、明治二(1869)年の「十二月九日認」に確定した。その後も沼川三郎(横井大平)は長崎で療養しながら、明治四(1871)年九月開校の「熊本洋学校」の準備をしていた。

この書翰の中心は、弟沼川三郎(大平)が兄伊勢佐太郎(横井左平太)の「来年(明治三年)五月より弥御入校」(「アナポリス海軍学校」)の知らせを喜ぶと共に、その政府許可の非常な遅れたことを兄以上に気遣った内容である。

この詳細な経緯については、次号で紹介する追加①「伊勢佐太郎書翰」(在米、西洋一八七一年第一月二十三日、我明治三年十二月二日)、下津休也・西田八右衛門宛(在熊本)と⑨A131「伊勢佐太郎履歴」によって詳しく見ていくので、本号ではその経緯については省略し、直接この書翰の内容について見ていくことにしたい。

①沼川三郎(横井大平)の帰国・「長崎肥後御屋敷」居住

後掲の「横井大平履歴」によると、大平の帰国理由は「大平肺患ニ罹リ、医ノ勧告ニ従テ帰朝病ヲ養フ」ためであつ

た。前号の⑥A132 伊勢佐太郎書翰〔日記書翰〕(在米、六月二十一日、明治二年五月十二日)・沼川三郎宛(在長崎)によると、沼川三郎(横井大平)は一八六九年六月二十一日に、ニュージャージー州のNew Brunswick(ニューブランズウィック)を「蒸気車」(蒸気機関車)で発ち、さらにニューヨークから「蒸気車」で、同二十五日にはシカゴ(Cicago)に到着していた。

その後シカゴからオマハ(Omaha)まで行き、その後ワイオミング州のローリンス(Rawlins)駅から5日ごとに書翰を出している。

大平は開業したばかりの「アメリカ大陸横断鉄道」(ユニオンパシフィック鉄道〔オマハーオグデン間〕・セントラルパシフィック鉄道〔オグデンーサンフランシスコ〕)はいずれも1869年に開通)を利用して、サンフランシスコまで行ったことがわかる。

その後出航日時は不詳であるが、サンフランシスコ出航の太平洋汽船で約一か月の航海の後、少なくとも西暦八月(和暦七月)頃には日本の横浜に到着、その後長崎の「肥後御屋敷」に帰着したと思われる。正確な月日はわからないが、この書翰の「先月(十一月)下旬」から肥後帰藩の積り云々の記述から、少なくとも「十月か十一月上旬」には長崎に到着し、大平は確実に十二月には「日本長崎肥後御屋敷」にいたことがわかっている。

この書翰は、明治二年十二月九日に認め、肥後に帰藩する長崎に居た内藤貞八(内藤泰吉の実弟か、肥後藩の物書役人、明治四〔1871〕年白川縣大属)に托したものであった。まず時候の挨拶と御機嫌伺いを記し、三郎(大平)自身の帰国後の生活も肺患の塩梅もよいので安心されたい旨を書き送っている。

また「先達て御帰着、即下御仕出しの御状」云々は、帰国した三郎(大平)の生活の様子と病状を心配して、肥後の宿許から「長崎肥後御屋敷」を尋ねて来ていたのであろう。書翰の宛名の「御母上様・おつせ様・又雄様」と、わざわざ「又雄」の名があるのは、おそらく小楠の妻つせ子が又雄(横井時雄、13歳)を連れて見舞いに来たのかもしれない。

書翰中には「同人(江藤)も沼山津之罷出」とあるが、この頃の横井一家は、明治二(1869)年一月五日に小楠が暗殺された後、沼山津の「四時軒」から本山村に、そして古城堀端に転居していた。その後宿許からの便りも無く、如何と案勞していたところ、先日「不斗」(ふと)内藤氏(内藤泰吉)・岩崎(人物不詳)から書翰が到着、「平安」と知らせてきた。内

藤游著『北窓閑話』(民友社 1927年)によれば、内藤氏(泰吉)の明治二年の動向について、つぎのように記している。

明治二年の正月五日に、先生の變(小楠暗殺事件)があり、悲痛言語に絶した。二月俺は軍務官病院副頭取を拜命し、月俸百圓を給せらるゝことになった。此の時の軍務官の軍醫漢・蘭(漢方・蘭方)合せて五十二名であった。軍(「戊辰戦争」)も済んだ(五月)ので、淘汰(人員整理)を行ふことになった。此の月(三月)江戸御臨幸(東京巡幸)につき、随従を命じられたが、病氣のため、之を辞して熊本に帰り、第(邸)宅を本山村に求め、十二月一日より医業を開いた。(15頁)

そうすると、この十二月九日付の書翰にある内藤貞八から三郎(大平)宛に差し出された書翰に、「内藤氏(内藤泰吉)・岩崎(人物不詳、乞御教示)御平安之段」を報知してきたが、おそらく同書翰には内藤泰吉が本山村に開業したことも記されてあったと推測しているが如何。

また三郎(大平)は「先月(十一月)下旬」から肥後に帰藩する積りでいたので、「書状さし出し」はしていなかった。三郎(大平)がアメリカ国から帰国したことは、すでに「御元よりも帰郷御伝え成られ、即ち三郎の帰国の件は宿許から親戚筋や知人にはすでに連絡済みと思って、別に「御書状御仕出し」は必要ないと考えていたのであろう。

去る(十二月)六日に有吉(有吉将監、または有吉市左衛門か、いずれも「執政」の一人)殿家中(家人)の江藤(知行取、江藤潤右衛門、または江藤武助のいずれか)が帰国(帰藩)するので、同人に頼み、「菓子箱、其の外羽織等さし出し置き」、今頃は「最早御落手下された」と思っている。三郎(大平)の帰藩が「延引」の理由については、江藤も承知しているのでは、本人が古城堀端の転居宅を訪問して、「夫々御申し上ぐべきとの事」である。

帰藩を予定しながら延引している理由は定かに記していないが、ただ「筆先にては情実通じ兼ね」とか「何角兎(何かと)御懸念」、さらに「相考え」との文言から、何か大きなことを計画していることがわかる。

さらに帰藩する内藤(貞八)にも、今度は「得斗」(念を入れて)「語り置き」、同人から「直に様子も言上」するので、「呉々も御安慮」(安心)していただきたいと記している。これらの重大案件は「熊本洋学校」の開設であったと思われる。

『近代熊本』第36号(2014年)の拙論「熊本洋学校」と「同志社英学校」に、この「熊本洋学校」開設前の「横井大平の尽力」について、つぎのように書いている。多少訂正を加えながら引用しておきたい。

アメリカ留学中の左平太・大平の二人は、西洋の知識・技術の修得に困難を来している理由には、その開始時期が高年齢で晩学にあるからだだと悟っていた。柔軟な低年齢から学ばせることが、西洋の知識・技術の修得には必要不可欠な条件だと身を以て実感していた。滞米中の生活で、兄左平太は肺病を患った大平を懸命に看病したが、大平の病気は治らないばかりか、左平太も感染してしまった。

大平は明治二(1869)年六月二十一日にニュージャージー州のNew Brunswick(ニューブランズウィック)を立ち、「アメリカ大陸横断鉄道」でサンフランシスコに到着している。正確な月日はわからないが、おそらく八月頃にアメリカを発ち、当時の「太平洋横断航路」は約一か月の日数がかかるので、九月中旬頃には横浜港に帰着か。その後大平は長崎に到着、十二月には「日本長崎肥後御屋敷」にいたことはわかっている。

当時の日本はまさに「明治維新」の最中であつた。肥後藩では明治三(1870)年は「肥後の維新」の初動期にあたり、「旧来ノ学校ヲ全廢シ、更ニ洋学校ヲ設立シ、洋人ヲ招聘シテ教師トセン」との動きがあつた。全国的には洋学校を開校して、外国人教師を招聘していた藩など一つもなかったし、その方法さえも十分知らない時期であつた。

帰国後、長崎で療養中の大平は、文久三(1863)年以来、洋学修業中の野々口為志に、洋学の幼年修得・外国人教師の招聘・本格的な洋学校の設立などを力説し、教師による生徒たちの人格養成や軍事訓練の必要性も主唱した。二人は一緒に帰熊、山田武甫少参事や長岡護美大参事に訴え、さらに細川護久藩知事に進言している。

このような経過の中で、大平が中心となり、肥後藩での洋学校の組織作りと御雇い教師の招聘を強く訴えた。その一方で大平はかつて自分が世話になり、当時大学南校(東京帝国大学の前身)の教師になっていたフルベッキに、その適任者の人選を依頼した。フルベッキは、明治三(1870)年八月と十一月のフェリス宛の書翰の中で、退役軍人で夫婦同伴者、俸給は3600ドル、十二月までの着任という条件で、その該当者の紹介を依頼した。

明治四(1871)年八月、大平はフルベッキにアメリカ退役

軍人L.L. ジェーンズ(Leroy Lansing Janes, 1838~1909)を紹介された。ジェーンズは北米オハイオ州に生まれ、ウェスト・ポイント陸軍士官学校出身で、「南北戦争」に従事、砲兵大尉であつた。また熱烈なアメリカン・プロテスタントのキリスト教徒でもあつた。

そのジェーンズの招聘は、年俸は4800ドル、月給400円の契約で実現した。校名は「熊本洋学校」とし、明治四(1871)年九月一日の開校に漕ぎつけていた。しかし大平の病は次第に重くなり、「熊本洋学校」の開校を待たずに、その年の四月二日、23歳の若さで死去した。その墓は池熊本市北区池田町の「放生院」境内にある。

②兄伊勢佐太郎(左平太)からの書翰とその三郎(大平)の対応

去る(十二月)五日、兄伊勢佐太郎(左平太)からきた御状を宿許に送るので、御覧に成られたい。その書翰には「大政官」(まま、太政官、明治元年閏四二十一日設置)からの「御免許」(ワシントン政府への「アナポリス海軍学校」入学許可願の件)が、「殊の外延引」しているのので、兄佐太郎(左平太)には「彼是御不都合」が生じていると記されていた。

弟三郎(大平)も「甚だ心痛」であり、自分も段々「心配」になってきたので、「当港の知事野村氏」(長崎県知事野村盛秀〔明治二年六月二十日~同三年十二月十九日〕)に面会して、兄の書状の趣を話したところ、野村氏本人から「直に東京府の方へ申し達すべき」旨との承諾をもらった。

その上、長州の人が「岩倉公子方御一同」に会いに東京に参るので、その同人にも「周旋を相頼み置き」、これで「何とぞ急にだち明き」(まま、らち開き、一気に開け掛ることか)になるだろうと思っていた。そんなところに、つぎの兄佐太郎(左平太)から「アナポリス海軍学校」入学許可を知らせる書翰がきた。

③兄佐太郎(左平太)の「アナポリス海軍学校」入学の知らせ

今般(十二月五日)の兄佐太郎(左平太)の「御紙表」(書翰)の趣は「アナポリス海軍学校」入学許可の件であり、「最早(もうすでに)御手元(左平太)へ御達し、御受取りに相成り、万端御手数(入学手続き)等も相済み、入学許可が出たのが、一八六九(明治二)年十二月六日であり、その前日にこの「御紙表」を認めたと思われる。

そして兄佐太郎(左平太)は「来年(西暦一八七〇〔明治三〕年)五月より、弥よ御入校(「アナポリス海軍学校」入校)

との予定日を知らせて来た」と記す。それは「実に三郎においても、大慶の至り」であり、「もはや死しても苦しからず」の思いとまで言っている。「近日内には御神酒ども上げ」て祝うつもりであるが、肥後の宿許でも「ずいぶん御神酒ども御上げ成られ」ることだろうと記している。

この「来年(西暦一八七〇〔明治三〕年)五月より弥よ御入校(「アナポリス」入校)に相成り候御様子」の書き方から、三郎(大平)は、兄佐太郎(左平太)が一八六九(明治二)年十二月六日に「アナポリス海軍学校」への入学手続きを完了し、正式な入学は「来年(西暦一八七〇〔明治三〕年)五月」からと解していたようである。

しかし沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』(近代日本史料選書14、山川出版社 1985年)所収の四八「横井左平太書翰」の「伊勢佐太郎書翰」(在米、西洋一八七一〔ま、一八七〇〕年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日)、休也・八右衛門宛(在熊本)には、つぎのように記されていた。

毎年「アナポリス海軍学校」の開業期間(授業・座学)は、西暦十月一日より翌年五月二十日までであり、六月初めには「軍艦」に乗って「欧羅巴」(ヨーロッパ)諸州まで航海を実施し、英仏の海軍校に至る。第九月下旬に再び学校に帰ってくる。其の間に航海の現実(実地訓練)を教え込むとあり、三郎(大平)は航海訓練の開始月を「来年(西暦一八七〇〔明治三〕年)五月より弥よ御入校(「アナポリス海軍学校」入校)」と勘違いしていた可能性もある

④肥後藩注文の軍艦(龍驤丸、イギリス船)

肥後藩からの「御注文の軍艦」(龍驤丸、イギリス船、明治三年三月受領予定)は、十二月九日の三・四日前(明治二〔1869〕年十二月六日)に長崎港に着帆していたので、直ちに見物に行ったところ、「先年」(往年)に兵庫(勝海舟の「神戸海軍操練所」か)にて交流のあった「長州生竹田庸治郎」(長州藩英国留学生)という者が、英国より「便船」(定期便)で長崎に来たので、寛(ゆる)りと面会して、色々あちら(イギリス)の様子などを聞いた。

インターネットによると、「竹田庸治郎」は長州藩船「癸亥丸」で船将山崎小三郎と南貞助(高杉晋作の義兄)と共に英国留学生に選ばれた人物で、勝海舟の弟子的存在であった。長州藩は財政が厳しく、渡航資金は千両だけであったという。竹田は上海到着後、所用(事情)で一旦帰国したが、その後単独で渡英していた。

何れ近日内には、「牛嶋先生」(関流算学師牛嶋五一郎〔1820~1898〕、熊本藩士。航海術を学ぶ。熊本藩で初めての蒸気船・甲鉄艦龍驤丸艦長)を始め、その供人の輩が「出崎」即ち長崎にやって来ると、頻りに噂されている。藩注文の御船が長崎港から肥後藩廻し(搬送)になるのは、「来(明治三年)正月」と思われると記すが、実際は「龍驤丸」は、明治二(1869)年十二月六日にイギリスから長崎に廻着、翌明治三(1870)年三月六日に肥後藩が受領している。

ここで「横井小楠と鉄炮」(12)〔「近研会報」第497号(2013年5月)〕に掲載した肥後藩の「軍艦購入」について、「龍驤丸」(イギリス船)を含めた説明部分を、多少の訂正を加えながら引用しておきたい。

佐賀藩の「軍艦購入」から自力での「軍艦製造」までの経緯を一覧表にしたのが、つぎの表である。

船艦名	動力	製造国・藩	製造年	購入年	備考
飛雲丸	蒸気船	オランダ国	不詳	安政四(1857)年十月	
電流丸	蒸気船	オランダ国	不詳	安政五(1858)年十月	
観光丸	蒸気船	幕府所有	不詳	安政六(1859)年十二月	
凌風丸	蒸気船	佐賀藩	文久三(1863)年三月		自前造船
幕府船	蒸気機関	佐賀藩	慶応元(1865)年十月		注文船
観光丸	蒸気船	幕府所有	慶応元(1865)年十一月		返還

これに比して、肥後藩の場合は、佐賀藩が自前で蒸気罐の開発・製造に成功した文久二・三(1862・3)年頃に、肥後藩はやっと蒸気船の買上げを本格化させている。即ち肥後藩の蒸気船購入開始は、佐賀藩より7年程遅れていた。

詳しく見ると、文久二(1862)年四月、杉島手永坂口権太郎は長崎修業中に「イギリス船見調帳」を記し、翌文久三(1863)年には蒸気船の買上げ計画が始まる。元治元(1864)年四月、汽船運用の視察のため、関八郎助・山川亀三郎を肥前・久留米に派遣し、五月には本庄手永の水夫萬助に蒸気船乗組み出精のため苗字帯刀を許している。

元治元(1864)年九月には、肥後藩は最初の蒸気船「萬里丸」(フランス製・木製)を買上げ、十月に池部啓太・牛島五一郎らに新購入の汽船乗船を命じている。さらに十一月、田代儀左衛門に荒尾角兵衛と共に産物・蒸気船懸りを命じた。ついでながらこの年には横井小楠は「海軍問答書」を著している。

慶応元(1865)年三月には、池部啓太の蒸気船将心得を免じ、この年には池田手永松尾村掛に「蒸気船会所」を建設している。慶応二(1866)年六月、蒸気船「凌雲丸」(イギリス船・鉄製)を買上げ、七月には「奮迅丸」(製造国不詳・鉄製)を買上げている。

細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』には、副奉行木村得太郎(鉄太)が「軍艦」購入のため長崎へ向い、その「軍艦」で帰藩とあるが、おそらくこの「軍艦」が蒸気船「凌雲丸」(イギリス船・鉄製)であろう。

また肥後藩は、十二月には溝口孤雲を「軍艦」製造につき、英国水師提督との談判のために長崎に出張させている。おそらくこの「軍艦」が後述する装砲9門の「龍驤丸」(イギリス船・鉄製)と推測される。この「龍驤丸」は文字通り「軍艦」であり、明治二(1869)年十二月六日にイギリスから長崎に廻着、翌明治三(1870)年三月六日に肥後藩は受領している。

この他にも、つぎの表のように、慶応三(1867)年四月には、風船「泰運丸」(アメリカ製帆船・木製)、六月には、風船「神風丸」(スコットランド製帆船・木製)など、古蒸気船や風船(帆船)などの購入が矢継ぎ早に行われ、同時に百貫石の蒸気船会所には石炭蔵(貯炭庫)を建造するなどしている。

下の表は、肥後藩の購入した船艦6隻の規模などについて、小橋元雄編『熊本藩国事史料・全』(民友社 1913年)の巻之壱「第壱編・新藩制施行及廃藩置県之関係」、第壱章「藩知事任命制度改革」によって作成したものである。

これらは、明治二(1869)年八月に明治政府兵部省からの令達に対して、熊本藩の井上治部丞は「龍驤丸」を除き、つぎのような「艦船標章容積等申告」を行なっている。

西洋式蒸気船并風帆船共、當藩所持之分、船章并破損等、御届仕候様、御達御座候付、直に其趣申越候處、折節所々に乗廻居候砌に付、損所有無取調延引に及、稍相分、別紙之通御座候。尤萬(萬里丸)・凌(凌雲丸)二艦之儀は、損所出来、當時運轉成兼候段申越候。此段御届申上候。

八月
熊本藩 井上治部丞
兵部省御役所

明治二年八月段階で、肥後藩が所持していた「西洋式蒸気船并風帆船」の船名・旗章などの「船章」や破損状況を申告しているが、おそらく蒸気船購入の際も幕府に申告していたものと思われる。

同年八月十三日付で、「萬里丸」と「凌雲丸」に関しては、兵部省から熊本藩に品川海に廻航するよう令達と、直ちに再命を待つべき旨の令達が出されている。おそらく「戊辰戦争」(1868.1.3~1869.5.18)の終結の経緯と関係があるものと思われる。

船艦名	動力	材質	製造国・原名	製造年	購入年	形状・規模	備考
萬里丸	蒸気船	木製	フランス製 コスモスポライト	1859年	元治元(1864)年九月	長さ222尺・幅35尺・積荷高600噸	中古船
凌雲丸	蒸気船	鉄製	イギリス船 グラナーダ	1857年	慶応二(1866)年六月	長さ180尺・幅30尺・積荷高150噸	中古船
奮迅丸	蒸気船	鉄製	不詳 フェリーヤ	不詳	慶応二(1866)年七月	長さ14間2尺・幅1丈3尺7寸・積荷不可	中古船
泰運丸	風船	木製	アメリカ製 ユリヤ	1863年	慶応三(1867)年四月	長さ120ft・幅27ft・積荷高385噸2分5勺	中古船
神風丸	風船	木製	スコットランド製 カゴシマ	1866年	慶応三(1867)年六月	長さ25間・幅4間余・積荷高394噸5分の9	中古船
龍驤丸	装鉄艦	鉄製	イギリス船	1868年か	明治二(1869)年十二月 明治三(1870)年三月受領	長さ36間2尺・幅6間2尺・排水量2570噸	注文新造

また肥後藩は、明治三(1870)年三月六日に長崎でイギリスから購入・受領した軍艦「龍驤丸」は、装砲9門(舷側砲64斤・8門、舳〔とも、船首〕自在砲100斤・1門)、乗組員定員272人の鉄製軍艦であった。

しかし一か月余の後即ち同年四月十二日には、細川熊本藩知事名で、明治政府に献納している。その経緯を示す書には「海軍御興張之御旨趣を奉體し、甲鐵艦一艘献上致度上表之趣、神妙之事に付被聞食届候事」と記されている。

⑤宿許の歳仕舞の加勢

其の外願目(願い事の意か)として、三郎も一日(正月一日)に「帰郷の心得」(帰藩の予定)でいるので、「歳晩」(年末)の「仕舞」(家の大掃除)には間に合わない。それでどうされる積りかと問いかけ、「まげて」(無理しても)「仕舞」われるのではないかと心配している。

今度は長崎の「熊本社中」にいた嘉悦(市之進、氏房)と内藤(貞八)に、私からも加勢を依頼する書状をやっているの、何事も兩人へ相談され、「御仕舞い置き」(大掃除を終える)なされたい。

三郎自身は今少し「甘快」(恢復)になったが加勢はできない。「どうぞして」(何とかして)「御世話置き」(迎春の歳末すす払い・片付けなど)されるように願いたい。

⑥「御遣し」(贈答品)の依頼

三郎の寓居「長崎肥後御屋敷」の隣家「得永屋」には、弥よ(ますます)世話になっている。若し御元より便り(肥後便)がある時は、何ぞ「御遣し」(贈答品・お土産)を一緒に送ってもらいたい。色々伝えたい事もあるが、「何分残筆に(残りの分量では)尽し難く」、委細は内藤(貞八)より伝聞されてほしい。先は伝えたいことを書き、それ以外は「後音」(後便)に譲る。目出度可祝(めでたくかしく)。

十二月九日認 沼川三郎(横井大平の変名)

御母上様・おつせ様・又雄様

⑦二白(追伸)

「甚寒の砌」なので「御自養」して暮されたい。小楠の妻「おつせ」(つせ子)は「御大病」後なので、「寒気」には十分気を付けて「御保養」されていただきたい。また先日「お宮」(小楠・つせ子の娘みや子)には「羽織」を送った。「どうぞ

気に入り候かし」と祈っている。

先達て以来、「吉雄」(吉雄圭齋)の世話で、「取だち(搾り立て)の牛乳」を手に入れた。「日々一合ずつ相求め、怠らず相用い」ている。「製法致し候ち」(加工牛乳)よりも、どうしても(比べ物にならないくらい)宜しい様に思われる。この書翰から、沼川三郎(大平)の長崎での肺患治療の主治医はこの吉雄圭齋であったと思われる。

インターネットによれば、「吉雄圭齋」(1822~1894)は、オランダ通詞吉雄耕牛の曾孫にあたり、家業は外科医で、オランダ商館出入りの医師であった。嘉永元(1848)年に来日したオランダ軍医のモーニッケに牛痘接種法を学び、翌1849年にバタビア(ジャカルタ)で牛痘苗の発痘に成功し、植林宗建らとその普及に努め、その後養生所・精得館で、ポンペ・ボードインに西洋医学を学んでいる。

また前掲の内藤游著『北窓閑話』によれば、内藤泰吉は明治三(1870)年藩命を受けて長崎に出張し、「吉尾桂齋」(ま、吉雄圭齋)を熊本病院初代院長に招聘している。そして同冬には吉尾(吉雄)の建議により、長崎に居たオランダ人医師マンズフェルトを招聘し、明治四(1871)年に蘭方の病院が開院された。

ところが漢方医は因循家と呼応して、盛んに病院の悪口をいい、ついに「病院が吉尾よしと いふけれど 命は内藤末は寺倉」との「戯れ歌」まで作って騒ぐ有様であった。「吉雄圭齋」はこの状況を嫌い、同年内に熊本の蘭方病院を辞職して、長崎に帰って開業している。

おわりに

この⑧A148「沼川三郎(横井大平の変名)書翰」は、明治二(1869)年の「十二月九日認」に肥後宿許の「御母上様・おつせ様・又雄様」宛に認めた書翰で、このシリーズでは「沼川三郎」(横井大平)の変名を使用した最後の書翰である。

大平は、慶応二(1866)年四月の密航渡米の際に使用した変名「沼川三郎」を明治四(1871)年四月に死去するまで使い続けたかどうか定かでないが、少なくともこの一八六九(明治二)年十二月九日付の本書翰まで、都合3年半は使用し続けていたことになる。

この書翰後の大平の活躍についてはすでに略記したが、さらに⑨A152「横井大平履歴」(月日不明)の原文を掲載しておきたい。

年ヲ諭(こえ)テ、太平肺患ニ罹リ、醫ノ勸告ニ從テ
帰朝、病ヲ養フ。時ニ天下維新ノ政治ニ風靡ス。從テ
熊本藩政モ亦改革アルニ際シ、旧来ノ學校ヲ全廢シ、
更ニ洋学校ヲ設立シ、洋人ヲ招聘シテ、教師トセント
ス。

然レトモ、天下未タ洋学校及洋人招聘等ノ挙有ルノ
藩ナシ。人多クハ、其指針及施為(実現)ニ憊(はかな)
シ。故ニ大平、其顧問ト為リ、遂ニ學校ヲ組織シ、米
国ノ教師(L. L. ジェーンズ)ヲ招聘セルハ、蓋シ其尽
力ニ由レルナリ。

明治四(1871)年ニ至リ、病漸ク重ク、某月日(四月
二日)、終ニ熊本堀端ノ家(小楠暗殺後、横井一家が沼
山津を引き払い、明治三〔1870〕年初秋に熊本城下の濠
端〔堀端〕に転居)ニ於テ、簀(さく)ヲ易(か)フ〔死床
を取り換える意から死去〕。齡二十何年(二十三才)、熊
本出京町往生院境内、先塋(せんえい、祖先の墓所)ノ
傍ニ葬ル。

(次号につづく)

参考文献 (本号分)

- 帝国書院編集部編『地歴高等地図——現代世界とその歴史的背
景』(帝国書院、2017年)
沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』(近代日本史料選書
14、山川出版社、1985年)所収の四八「横井左平太書翰」
内藤游著『北窓閑話』(民友社、1927年)
小橋元雄編『熊本藩国事史料・全』(民友社、1913年)の卷之七
「第壹編・新藩制施行及廢藩置県之關係」、第壹章「藩知事
任命制度改革」
細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』(熊本大学附属図書館、
1974年)
高野和人編『肥後細川家分限帳』(青潮社、1991年)
山崎正董編著『横井小楠』伝記編・遺稿編(明治書院、1938年)
拙論「熊本洋学校」と「同志社英学校」(『近代熊本』第36号、熊
本近代史研究会編、2014年)
拙著「横井小楠と鉄炮」(12) (『近研会報』第497号(2013年5
月)所収
拙編「横井小楠書簡要録」(私家版、1986年)
拙編「横井小楠同志・門人一覧」(私家版、2011年)
「竹田庸治郎」mn1552.blog15.fc2.com/blog-entry-710.html
(最終閲覧日2020/01/31)
「吉雄圭齋」https://kotobank.jp/word/吉雄圭齋-1119488
(最終閲覧日2020/01/31)

Letters written by *Saheita*, Yokoi Tamako's husband, and his younger brother *Daihei* before and after their stay in the United States (6): from the archive of the family *Yokoi* in the Kumamoto University

TSUTSUMI Katsuhiko

Yokoi Saheita (横井左平太)'s brother Daihei (大平) returned
to Japan from America for pneumonia in autumn of 1869.
Subsequently, Daihei (大平) lived in Higo han's estate (肥
後藩屋敷) in Nagasaki (長崎), and sought a remedy for his
pneumonia. Daihei wrote a letter (A148) to Yokoi's family in
Higo han.

In this letter, Daihei was concerned that Saheita did not
enter Annapolis Naval Academy smoothly, and he requested
Nomura Morihide, governor of Nagasaki prefecture (長崎県知
事野村盛秀) for admission in the same school. Later, Daihei
received Saheita's letter from America; he informed about
his successful admission to the academy at last. Daihei felt
relieved when he read that news.

Daihei resolved to do an important project, but he did not
give details about it to his family. I believe it was the opening
of "Kumamoto yogakko" (熊本洋学校) that promoted western
learning in Kumamoto.

Higo han had ordered a new iron steamship (named
Ryujuomaru) from England. Daihei visited to see the ship
when it arrived at the Nagasaki port. He heard that Ushijima
Goichiro (牛嶋五一郎) who learned warship navigation
from Higo han and others would come to receive the ship.
I explained about the warships in Saga han and the foreign
warships purchased by Higo han in this article.

In addition, Daihei was afraid that Yokoi's family could not
prepare for New Year's day because of shortage of assistance.
Moreover, he was worried about Yokoi Tsuseko, Yokoi
Shonan's wife, falling seriously ill, and he gave haori (羽織),
a short coat for formal wear, as a present for Miyako, Shonan's
daughter.

Concluding this letter, Daihei wrote that he drank a cup
of raw milk every day, and expressed how much better it
was than processed milk. He thanked Yoshio Keisai (吉雄圭
齋), who was Daihei's family doctor, for the advice for his
pneumonia.